



1



2



3



4



5



6

1. 沖縄笠団扇文部屋着 麻、型染 1960年 丈132cm
 2. 知恩院御影堂荘厳布下絵 1974年頃 横77.9cm
 3. 竹に小梅文飾り布（部分） 木綿、型染 1953年
 4. 松皮菱に模様入丸文散らし着物（部分） 綸子、型染 1942年頃
 5. 伊曾保物語屏風（部分） 4曲1隻 紬、型染 1932年
 6. 絵本どんきぼうて（部分） 和紙、合羽刷り手彩色 1936年
1. 静岡市立芹沢銑介美術館蔵 2. 個人蔵

芹沢銑介こぶすまの小襖特別公開 本展の開催にあわせ、西館（旧柳宗悦邸）で芹沢銑介作の小襖を特別公開します。 ※西館公開日のみ見学可能
□公開日 9/9、9/12、9/16、9/19、10/10、10/14、10/17、10/21、11/11、11/14、11/18、11/21 □開館時間 10:00～16:30（入館は16:00まで）



記念講演会 芹沢銑介の魅力

〔講師〕 白鳥誠一郎（静岡市立芹沢銑介美術館学芸員）

10月17日(土) 18:00-19:30 〔料金〕 300円（別途入館料が必要）〔定員〕 100名（要予約）

□開館時間 10:00-17:00（入館は16:30まで） □休館日 月曜（ただし祝日の場合は開館し、翌日振替休館） □入館料 一般 1,100円 大高生 600円 中小生 200円 □所在地 〒153-0041 東京都目黒区駒場4-3-33 □電話 03-3467-4527 □交通 京王井の頭線駒場東大前駅西口より徒歩7分

<http://www.mingeikan.or.jp/>

日本民藝館



機織図四曲屏風 麻、筒描 1935年 縦175.8cm

生誕120年記念

芹沢銑介 展

Serizawa Keisuke

– the 120th anniversary of his birth

2015年9月1日(火) – 11月23日(月・祝)

日本民藝館



雑誌『工藝』創刊号と帋 1931年
装丁・芹沢銈介



スペインの民家 肉筆
1966年頃 横21.8cm 個人蔵



岩偶 芹沢銈介寄贈
岩手県岩泉町斐綿出土
縄文時代晩期 BC800年頃
幅19.3cm



芹沢銈介 1970年 藤本巧撮影

本展は、今年生誕 120 年を迎える染色家芹沢銈介の初期から晩年までの作品を通し、芹沢銈介の創造の世界を紹介するものです。

芹沢銈介（1895－1984）は、静岡県静岡市の呉服太物卸商の家に生まれました。1916 年、東京高等工業学校図案科を卒業後、静岡県立静岡工業試験場等で図案指導の職につきますが、「図案という空なものではなく具体的な“物”に自分を見出したい」と実作への思いを持ち始めます。

作家への道を模索していた芹沢にとって、当館創設者の柳宗悦(1889－1961)との出会いが大きな転機となりました。1927 年春、芹沢は朝鮮へ向かう船中で柳の著した『工藝の道』を読み、「工藝の本道初めて眼前に拓けし」と深い感銘を受けます。そして、翌年、上野の御大礼記念国産振興博覧会に柳らが出品した「民藝館」において、沖縄紅型の風呂敷を見た芹沢は、その色と模様強い感動を受け、型染を生涯の仕事と志すことになったのです。

また芹沢は、柳の依頼によって雑誌『工藝』の表紙装丁を 1931 年の創刊号から 12 号分、1 号につき 500 部以上を型染で手がけます。型染を始めてまだ間もない芹沢にとってこの経験が数ものへの道を開き、将来 500 冊近く手掛ける本の装丁の仕事へと結びつきました。

1939 年 4 月、芹沢は柳ら民藝協会の同人達と沖縄へ渡ります。そして当時沖縄で、紅型の伝統をわずかにつないでいた職人、瀬名波良持と知念績秀から伝統的な紅型の手法を学びます。この 59 日間にわたる沖縄滞在の経験が、芹沢の「いわば私の仕事の故郷」「全く私の竜宮」と回想する沖縄の原風景となり、終生紅型に憧れ続けた芹沢の仕事の礎となりました。

戦後は、不足した布地の代わりに和紙を用いる「染紙」という新しい試みにより、芹沢作品が広く人々の間に普及しました。蒲田に十分な仕事場を得た後は、「沖縄笠団扇文部屋着」（図版 1）等の代表作を次々と発表。世の中を明るく照らすかのような作品は、国内及び海外から高く評価され、1956 年 4 月、図案から型彫、染までを一貫して行う「型絵染（かたえぞめ）」で重要無形文化財保持者に認定されました。

本展では芹沢作品の理解を深めるために、芹沢が筆で直に描いた肉筆作品と、静岡市立芹沢銈介美術館で所蔵する芹沢の蒐集品を併せて展示します。

芹沢は植物や風景、蒐集品などを対象に、始終膨大な数のスケッチを欠かさず、それが作品を作る上での根本的な力でありました。それらスケッチや作品の下絵を含む肉筆画、絵付陶器、ガラス絵など「型」を通さない作品からは芹沢の生の芸術性を見ることができます。

そして、芹沢が自ら「もうひとつの創造」と呼んだ蒐集品は 20 代の小絵馬から始まり、染織・陶磁など様々な分野、あらゆる国々へと広がり、その数は戦後だけでも約 6000 点に及びました。芹沢の確かな選択による蒐集品は、柳や陶芸家の濱田庄司からも高く評価され、当館にも芹沢旧蔵の作品が数多く寄贈されています。

このように、写生によって培われた優れた描写力と、ものの美しさを的確にとらえる鋭いまなざしから生まれた芹沢作品は、自由闊達に観る人の心をとらえています。芹沢は、工芸による「美の生活化」を目指した柳の民芸論を実践し得た稀有な作家の一人と言えるでしょう。

展示室 1 階

〔玄 関〕 生誕 120 年記念 芹沢銈介展－芹沢銈介の蒐集

〔第 1 室〕 日本の民窯

日本民藝館が所蔵する民窯^{みんよう}の優品を中心に、約 50 点を展示紹介いたします。民窯とは民衆の実用品を焼いた窯^{かま}のことで、藩窯^{はんよう}などに対する言葉でもあります。展示品は九州や東北の諸窯・壺屋・瀬戸・丹波など、日本各地の陶器で、主に江戸期以降に作られました。

〔第 2 室〕 沖縄の紅型

沖縄の紅型は芹沢銈介の型絵染の原点ともいえます。紅型は型紙を使い、大柄な模様から小紋まで、顔料や染料で色鮮やかに染められています。模様は松竹梅や桜などの植物をはじめ鶴や雁などの鳥、そして風景など日本的な要素が色濃くみられます。

〔第 3 室〕 民芸運動の染織家

柳宗悦や芹沢銈介と縁を結び、民芸運動のなかで活躍した染織家達の作品を日本民藝館の所蔵品より紹介します。岡村吉右衛門、小島恵次郎、柚木沙弥郎、立花長子、古沢万千子らの型染や片野元彦の絞り染、柳悦孝や柳悦博の緋、宮平初子の花倉織など素材や色や模様をお楽しみください。

展示室 2 階

〔大展示室〕 生誕 120 年記念 芹沢銈介展

〔第 1 室〕 朝鮮時代の諸工芸

韓国の朝鮮時代（1392－1910）には、民族固有の造形文化が大きく花開きました。この展示室では、主に 18 世紀から 19 世紀にかけて人々の暮らしを彩った、陶磁器や木工品、金工品、石工品、そして民画の数々を紹介します。おおらかで活き活きとした朝鮮工芸の魅力をご堪能ください。

〔第 2 室〕 民芸運動の仲間達

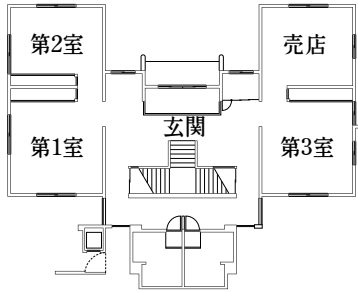
「美の標準の提示」と「新しい創作への準備」を使命とする当館は、芹沢銈介はもちろんのこと、バーナード・リーチ、濱田庄司、河井寛次郎、棟方志功といった個人作家の研鑽の場でもありました。彼らは民藝の美に触発されながら、自らの創作の道を切り拓いていったのです。

〔第 3 室〕 芹沢銈介と柳宗悦

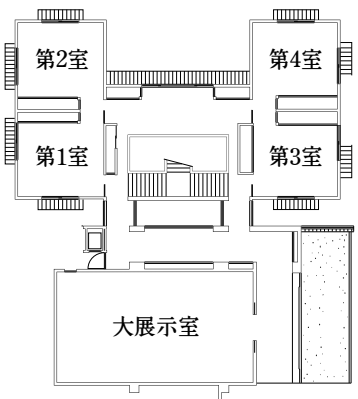
芹沢銈介と、日本民藝館の創設者・柳宗悦。柳は、芹沢が生涯を通じて唯一師と仰いだ人物です。本展示室では、柳によって書物などに記された芹沢銈介の作品や、芹沢銈介が装丁した柳宗悦の書籍など、芹沢銈介と柳宗悦の関わりを示した作品を中心に展示します。

〔第 4 室〕 芹沢銈介と日本の手仕事

芹沢作品には、民芸運動を通じて目にした工芸や風物が、様々に表されています。ここでは、柳の著作『手仕事の日本』（1948 年）などで使用された芹沢による小間絵とそのモチーフとなった工芸品、そして生産地の情景や職人をモチーフとした芹沢作品を特集します。



〔1階第3室〕
白地霞枝垂桜牡丹文様紅型衣裳(部分)
琉球王朝時代 19世紀



〔2階第1室〕 白磁壺
朝鮮時代 18世紀 高 37.0 cm